



つながりを求めて

私の手元に「大宮つげの会～男女共生推進グループ～」という冊子があります。「大宮つげの会」は、女性の地位向上や男女平等社会の確立に役立つ活動を行い、女性問題の推進グループとしてのネットワークづくりをめざして1993年4月23日(平成5年)に発足しました。この冊子は、その10年の活動の記録です。この年は、旧大宮市に女性政策課も誕生しました。

男女共同参画という言葉がまだ一般に知れ渡っていない1995年(平成7年)頃、私は、つげの会会長木村通恵さんとお会いしました。つげの会が旧大宮市に新しくできる「女性センター」に、要望書を出すための学習会に私が参加したことがきっかけだったと思います。つげの会は、他市の女性センターの施設の見学や関係者を呼んでの学習会など設置には積極的に活動をしました。念願のさいたま市男女共同参画推進センター(愛称 パートナーシップさいたま)は、2004年(平成16年)5月に開設されました。10周年記録誌は、「新設の10階建てビルの3階に女性センター ～中略～ となること。つげの会では、これからも市民参画で、企画・運営にかかわっていききたい」という記事が最後で2004年(平成16年)に発行されました。

つげの会は、ネットワークづくりをめざす活動も続けてきました。旧大宮市に女性政策課が誕生し、女性政策の啓発や情報の発信のために女性政策課主催で行われた「女(ひと)と男(ひと)のシンポジウム」に毎年参加して学びました。そこでのグループ間のネットワークをつないで、大宮市女性団体連絡協議会となり、初代会長は木村通恵さんで、女性政策課と共に女性問題の掘り出しや解決に向けての行動を起こしています。さいたま市となってからもさいたま市男女共生推進団体連絡協議会として活動は続けられ、2002年(平成14年)1月に第1回の「女(ひと)・男(ひと)フェスタ さいたま」が開かれました。分科会も「教育」「環境」「家族問題」「子育て」「地域社会への参画」と男女平等に向けての課題を網羅したもので、その後も地道に着実に歩んできました。

それから20年。さいたま市男女共同参画推進団体連絡協議会とさいたま市との共催で行われてきた「女(ひと)・男(ひと)フェスタさいたま」は幕を閉じ、今年度から第1回パートナーシップさいたまフェスタとして新たなスタートをします。コロナ禍の中でも男女共同参画社会実現に向けた歩みを進めるため、オンラインによる開催となりました。スマートフォンやパソコンの発達でどんどん広がるネット社会で、新たな試みを楽しみながら、人とのつながりを作っていきたいと思います。女性学研究会もオンライン読書会で『女の子はどう生きるか—教えて、上野先生!』(上野千鶴子著 岩波ジュニア新書)を取り上げます。(4ページ参照)ご参加お待ちしております。

(磯部)



『持続可能な魂の利用』

松田青子 著
中央公論新社
(2020年)



不思議なタイトルだ。魂は滅びないのだから持続可能にきまっているが、どういうことなのか。戸惑いながら本を開く。

『「おじさん」から少女たちが見えなくなった。だから少女は自由になった』と、突然「おじさん」登場のこの導入部分は、この本の核を成す重要な一文だ。

日本のアイドル文化に、「おじさん」と日本の女性との関係性が象徴されているという。アイドルは未熟で、弱々しく、かわいくて、男に従順で。これまでこの世の中は何もかもが「おじさん」によって作られ「おじさん」にとって都合のいい、いわゆるアイドル的要素を女性が求められていることは、あらゆる場面に浸透しているのだ。このように「おじさん」が女性にとっていかに有害かが、これでもかというほど書かれている。食傷気味になるくらいに。

そんな女性たちもただおとなしく、歯ぎしりをしているわけではない。「おじさん」を完膚なきまでに叩きのめすのだ。退治するといった方がいいだろうか。ここは大いに溜飲が下がる。

最後の章になって、ようやくタイトルの意味がわかってくる。これは壮大なファンタジーなのだ。(だが遠い未来には可能かも。)

長い間醸造されてきた「おじさん」意識の集合体に憑依されているのは、圧倒的に男が多い。しかし程度の差こそあれ、実は私たち女も憑依されていると思う。まずはそのことに気付くこと、客観的に眺めることが必要だとこの本は私に教えてくれた。(中野)

※憑依(ひょうい); 1 頼りにすること。よりどころにすること。 2 霊などがのりうつること。

※松田青子さん、『おばちゃんたちのいるところ』英訳版
世界幻想文学大賞 短編集部門 受賞

『これからの男の子たちへ』

「男らしさ」から自由になる
ためのレッスン
太田啓子著
大月書店
(2020年)



子ども達は、家族や教師、周囲の大人、友人、TV、インターネット等々の取り巻く社会からのメッセージを受け取って育つ。ジェンダーを刷り込まれた大人達や社会からの悪影響を、自分の子ども達が受けたくないよう、常にアンテナを張っていく。必要不可欠な力ではないだろうか。

男の子を育てる時、何に注意し力を注いだらよいのか、著者が“やめたほうがいいのか”という問題は、次の三つだ。

「男子ってバカだよ」問題(男子に限る? おバカな振る舞いに性別は関係ないのでは? 他者への暴力的な振る舞いを見逃していないか?)

「カンチョー放置」問題(性暴力を軽視していないか?)

「男の子の意地悪は好意の裏返し」問題(相手への尊重を欠く態度を正当化していないか?)

これらが「有害な男らしさ」の種になっていくことを懸念している。

社会から、暴力を振るえば「男の子はやんちゃで良い」と肯定され、意地悪をすれば「好きなのね」と許され(大目に見られ?)、痛みを感じ涙を流せば「男なら泣くな」と否定されていくと、他者と対等な関係性を築けない「有害な男」が育ってしまうのではないか?

私が子どもの頃、スカートめくりが行われることがあり、女の子が追いかけているのを目撃しました。私は誰に言ってもムダと学習していたから、自分の身に起こらないよう怯え警戒した。ズボンに履き替えただけではその恐怖は無くならなかった。性差別、性暴力を「性的な、ほほ笑ましいこと」として軽く扱われる恐怖はもういらぬ。そんな時代のくり返しは絶対に避けたい。
(野田)

『我らがパラダイス』

林 真理子著
集英社文庫
(2020 年)



「古い」は誰にでもやってくる。お金持ちにも貧乏人にも。公平に。

しかし、本当に「公平」なのか。

本書を読み、そんなことを考えた。

舞台は「日本一素晴らしい」高齢者用マンション。信じられないほど高額の手付金を支払うことのできるものだけが入居できる。ホテル並みの食事やホスピタリティ、アクティビティも充実しており老人たちはみな生き生きと毎日を送っている。介護が必要な状態になれば一般の居室から 24 時間体制で看護師や介護士が常駐する「上の階」へ引越すこととなる。死ぬまで安泰、「地獄の沙汰も金次第」ということか。

職場は看護師も介護士たちも余裕をもって仕事をしている。シフトに無理がなく給料がよい。だからみな笑顔だし老人たちにやさしく丁寧に接することができる。「床ずれ」なんてできるはずもない(いや、本来はできてはならないものだ。)

やはり「金」なのか。

「やりがい」や「使命感」を引き出すためには必要なものは最終的には「金」なのか。

ところで登場人物たちがシュールな計画を実行することで物語は現実離れするのだが、そのために本当はとても重く、重要な課題が軽やかに描かれている。ここで働く者の親の入居先は、この素晴らしい施設のようにはいかない。その現実に打ちのめされる。打ちのめされているのは「私」であり「あなた」かもしれない。

そもそも設定が非現実的すぎるのだが、そのおかげで、いずれやってくる「古い」をどう受け止め生きていくのか、重く大切なことをおおらかに考えるきっかけになったように思う。

(佐藤)

『女の子はどう生きるか』

—教えて、上野先生！—

上野千鶴子
岩波ジュニア新書
(2021 年)



「あなたたちはどう生きるか—女の子の翼を折らないために」というタイトルで著者は前書きを書く。「女の子の翼を折らないように」という言葉は、ノーベル平和賞を史上最年少で受賞したマララ・ユスフザイのお父さんの発言からお借りしたという。育ちたい、学びたい、成長したいという「翼」を折らないように育てたという。

著者は、「残念ながら、いまの日本では、『女の子の育て方／育ち方』と『男の子の育て方／育ち方』がずいぶん違います。だからこそ、『女の子はどう生きるか』という本が書かれなければなりません。」と述べる。

上野先生は、44 の質問に全力で答えられた。質問 9「専業主婦に憧れます！ お金持ちと結婚してセレブな専業主婦になりたいけど、だめですか？」質問 10「ママみたいになりたくない！ ママは、完璧な専業主婦です。でも、私は家族に尽くすだけの人生はいやです。これってママを裏切ることになりますか？」正反対の質問に、みなさんはどう答えるだろうか。私たちは自分の人生に悔いを残しながら、子どもたちに思いを伝えようとする。そして、失敗しない道を示そうとする。

上野先生は、「おばあちゃんの時代の常識と、お母さんの時代の常識と、あなたがこれから生きる時代の常識は、大きく変わっています。」と言い切る。だから、おばあちゃんとお母さんには、「これからの時代は、おばあちゃんの常識も、お母さんの常識も通用しないから」「だから、わたしに決めさせてね」と言ってあげようと若い子たちにエールを送る。

最期に「あ～、おもしろかった」と言える人生を送れる社会にするために、古いも若きも取り組む課題であるのだとしみじみ思っている。

(礒部)

第1回パートナーシップさいたまフェスタ参加企画 オンライン読書会(まんなかタイムス共催)

2022年1月30日(日) 14:00~16:00 開催形式:オンライン(Zoom 利用)

課題本 『女の子はどう生きるか 教えて、上野先生!』上野千鶴子著(岩波ジュニア新書)

この本は、「女の子はどう生きるか」という問いに上野先生が「女の子の翼を折らないために」誠実に答えたものです。私たちが日常の生活の中で感じるモヤモヤした思いに答えてくれます。自分のモヤモヤの答えを探し、折り合いをつけてきた私たちは、女の子の問いにどう答えるか、みんなで話し合ってみませんか?

参加費:無料 定員:12人

申込方法:まんなかタイムス コンタクトフォームに必須事項とともに「1/30 ブックトーク参加希望」と書いてお送りください。 <https://mannakatimes.wordpress.com/contact/>



さいたま市女性学研究会(ゆい)主催「ブックトーク&井戸端会議」

2022年2月20日(日) 14:00~16:00 パートナーシップさいたま 第3会議室 定員24名

「生きのびるためにお金との付き合い方を考える」

コロナの波は、弱者、高齢者や女性により襲い掛かり、爪痕を残しました。その波はまだ続くのか誰にもわかりません。NPO 法人女性自立の会 理事長 有田宏美さんは、多重債務者との相談や家計管理、相談者のための勉強会など「人生は必ずやり直せる」という思いで様々な取り組みをしておられます。先行きを不安な気持ちで思い煩う私たちに何が出来るか、有田さんと共に「生きのびるためにお金との付き合い方」のヒントを探ってみませんか。

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。

■パートナーシップさいたま耳寄り情報■

**第1回パートナーシップさいたまフェスタ
「ジェンダー平等を実現しよう」**



開催期間 令和4年1月25日(火)~2月24日(木) [オンライン]

ジェンダー平等の実現は、SDGs(持続可能な開発目標)における17の目標のひとつです。

内容

- 1 基調講演「ノルウェーはなぜジェンダー平等を実現できるのか」
講師:三井 マリ子さん(女性政策研究家・ジャーナリスト)
- 2 基調講演「LGBTQと医療~誰もが必要な医療にアクセスできる社会を目指して~」
講師:吉田 絵理子さん(一般社団法人にじいろドクターズ理事)
- 3 出展参加団体によるイベント・活動紹介・展示
- 4 令和3年度パートナーシップさいたま主催オンライン講座 プレイバック配信
- 5 男女共同参画施策の紹介 等

開催情報はホームページにて順次更新

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/004/p084523.html>



「ゆい」2021年冬号 第4号 (2021年12月1日発行)

編集 さいたま市女性学研究会(ゆい)

マーク、題字 野田

<事務局> 磯部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com



発行 さいたま市男女共同参画推進センター | パートナーシップさいたま

〒330-0854 埼玉県さいたま市大宮区桜木町1丁目10-18シーノ大宮3F 電話 048-642-8107

<https://www.city.saitama.jp/006/010/002/index.html>